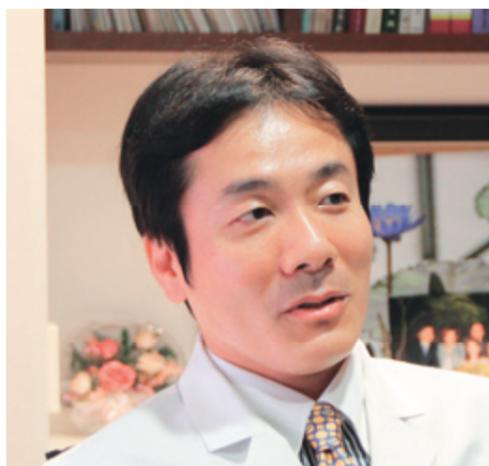


医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪



最先端の治療にこだわり 日本を代表するクリニックをめざす

2012年8月取材

広島県広島市
広島リウマチ・内科クリニック 院長

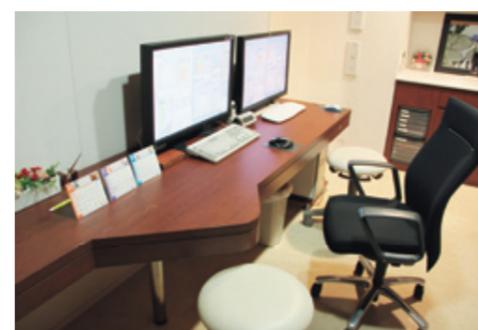
山西 裕司 先生

周囲に百貨店やビルが建ち並ぶ広島市の中心街に開業して3年半。広島リウマチ・内科クリニックには、日々多くの患者さんが訪れ、予約は1~2カ月先まで埋まっているそうです。院長の山西裕司先生は「クリニックでも総合病院と遜色のないレベルの医療を提供できるんです」と力強く語ります。

医師が医療により集中するために

開業する際に、山西先生が重要視したのが「医師が医療により集中できる環境」です。「患者さんと電子カルテのディスプレイを行ったり来たりしているようでは、良質な医療は提供できません」と語る先生は、医師の業務を補助する「医療クラーク」を診察の際、同席させています。

「私が患者さんと向き合っている間に、医療クラークが電子カルテの入力などを行います。私は入力に誤りがないかを確認・修正するだけなので、患者さんとのやり取りに集中できます」。また、検査結果やレントゲン画像に関しても、先生が一声かけるだけで、即座に医療クラークがディスプレイに表示するそうです。「データ“入力”の負担が大幅に軽減し、“解釈”と“説明”により力を注げるようになりました」と医療クラークの存在が医療の質の向上につながっていることを強調します。



手前から、患者さん、山西先生、医療クラークの順に座ります。2つのディスプレイは連動しており、医療クラークが奥のキーボードを操作すると、手前のディスプレイにもその内容が表示されます。

全身の68関節を触診する



ゆったりとした気持ちで待てることを意識した待合室。照明の光も柔らかく、温かな雰囲気を出しています。

山西先生は「患者さんの状態次第で省くこともありますが」と前置きした上で、「肩から始まり、肘、手首、手の指、膝、足首、足の指など、全身の68関節をできる限り自分の手で触って確認しています」と自らの診療のスタンスを説明します。

丁寧な診療を心掛ける理由は、一つは「圧迫してみないと分からない関節の腫れや圧痛があるから」だそうです。また、同クリニックは周囲に住宅のない繁華街に立地しているため、電車やバスなど公共交通機関を利用して、遠方から通院する患者さんも少なくありません。「当クリニックは近所のかかりつけ医を受診する感覚で通院できる医療機関ではありません。ですから、足を運んでいただける患者さんには、ここに来てよかった、と思って帰ってほしいのです」。もちろんこうした思いは先生だけでなく、スタッフ間でも共有されています。

最先端の治療にこだわる

2003年に生物学的製剤が登場し、わずか10年足らずで関節リウマチの治療は激変しました。「立ち止まっていたら取り残されてしまいます」と話す山西先生は、国内外のリウマチ関連学会に参加し情報を収集、あるいは自院のデータに基づいた生物学的製剤の治療成績について発表するなど、治療の最新の動向に触れる機会を積極的に持っています。

「最先端の治療にこだわりたい」と話す先生の姿勢は、薬物治療にも明確に表れており、生物学的製剤の使用量は「総合病院を含めてもかなり多い」と言います。「達成できるかどうかは別として、日本を代表するリウマチの外来クリニックを目指したい」と目標を語る先生。開業して3年半、ゴールははるか先でも、その足取りは確かです。



「“日本を代表するクリニック”というのは少し大げさかもしれませんが、それくらいの心意気は必要ですね」と山西先生。看護師をはじめスタッフも、この目標を念頭に置き、日々の診療や業務にあたっているそうです。